

## 元気で持久力のある北海道の農業基盤づくりと研究

秀島好昭\*



### 1. 元気な北海道農業

いま農業が非常に面白いとおっしゃる方が多い。巷ではアグリビジネスの展示会なども盛況であるし、熟年者の農家への転職志向も多いと聞こえてくる。地域では特産品の創出とそれを加工し付加価値を増加した生産品を販売し、経営収支の向上がめざましい町村もある。とくに農家の奥様が法人として起業し、そのパワフルな商業活動の舞台裏を殿方が見守るといった構図が見られる農業組織もある。消費者にとっても従来の規格化された農作物の需給に限らず、本来の農作物の特徴や作物の多様性を楽しむことはまさに「食文化」の広がりである。今年は「インカのめざめ」と言う小振りな馬鈴薯の販売がやたらと目に付く。このイモは個体重も小さく、収量も少なく、さらに病害虫抵抗性が低く栽培管理がとても難しいのですが、ただ一つの良点の「栗に似た風味と煮くずれしない性質等」から需要の開拓が期待されている品種である。消費者の食味・品質の多様化とこれに答えようとする農業者の技術ルネッサンスが感じられる事例である。地域に行けばその風土から生まれた農作物を美味しくいただける「地産地消」の機会を北海道は多く提供している。さらに食と観光が一体となり、道外の皆様にも北海道のおもしろさの理解を得ている。これら良味・良品の農作物の生産には管理の行き届いた土壌や排水さらに灌漑機能が必要で、北海道はパワーアップ事業（食料・環境基盤緊急確立対策事業）を平成17年度まで実施し、冷湿害に強い農業の推進に寄与してきた。国や地方が行っている農業生産基盤整備は、「食と観光の北海道ブランドづくり」を支えてきたと言われている。一方、どの事業分野もそうであるが財政改善のため国、地方は新たな知恵の創出と限られた予算の中で効果的な地域の基盤づくりの継続が必要となっている。事業に適

用する科学技術の開発も「地域工学」とした視点での目標や成果へシフトし、「地域で産れた知・技術を地域で適用・昇華する（知産知昇）」が必要な時期となっている。

### 2. 北海道の農村財産の維持

北海道の農村地域には4～5の資源があると言われる。施設資源（水資源）、農地資源、環境資源、有機性資源さらに環境と分離した場合の観光資源である。施設資源のストックは3.7兆円（全国22兆円）であり、江戸末期・明治初期に南北海道で灌漑溝が造られて以来、7千kmにもおよぶ基幹水路を保持し（全国4万km）、広大な農地へと用水を供給している。これら施設機能の長寿命化やスムーズな更新を可能とする計画技術のルール創り・予防保全の実施が急務である。農地資源については、高齢化や新規の農業参入者などの構造変化や特色のある地域農業へ流動的に対応できる土地利用の実践が肝要であろう。環境資源については、農業と環境の調和を重視するとともに、美しい農村の維持・創造が北海道の観光産業をさらに加速する。農林水産業からでるバイオマス資源の利用技術開発は、「北海道のクリーン農業」や「北海道農業のスタンダード化」へ欠かせない課題であり、パイオニアスピリッツが底流する北海道として、そのエネルギー利用を含め、常に革新的な技術開発と地域での実践的な取組みが期待される。

私どもはバーチャルな地球の上で生活していると一部で言われる。すなわち、人が生活するために必要な食料・燃料などを確保する面積を試算すると既に地球1個では足りない社会や産業を創りあげている。身近にある地域の産業が将来も継続できるように技術の進展を図っていく必要がある。

北海道開発土木研究所 農業開発部長（特別研究官兼務）\*